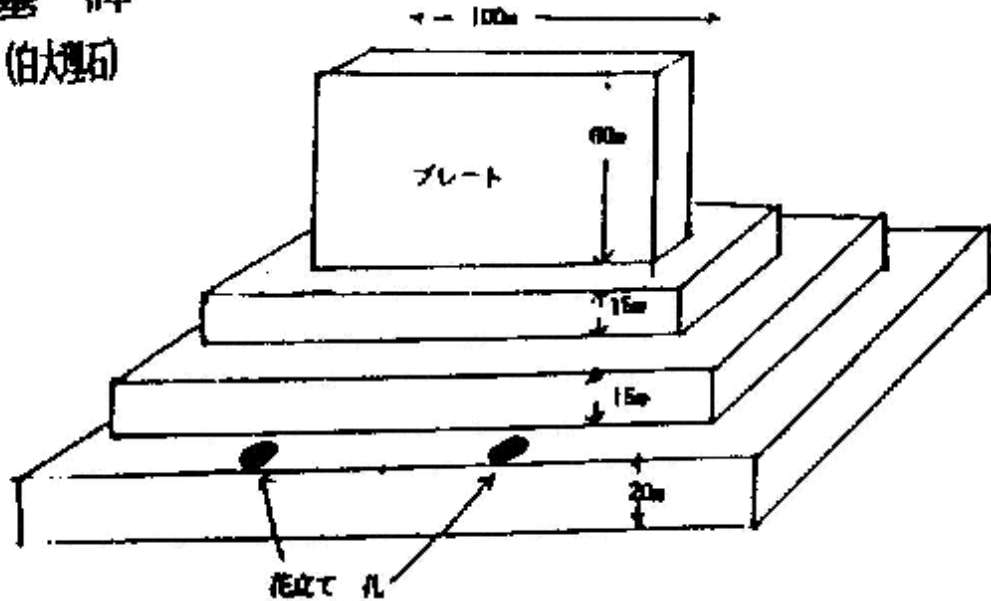


6 オルハ村第八収容所墓地

イルクーツク州オルハ村第8収容所墓地は、街の人に尋ねても誰も知らない。混成大工大隊の作業隊が働いていた事等は、今の人達の関心にはない。未来ばかり見ている。まして昨今はそうなのだ。知らなくて当然なのだ。しかし、ロシア人にも変わった者も居る。例えばチタのスイチョフがそうだった。此処イルクーツクにも、ボランティア団体でイスティーナというのがあり、手弁当で日本人捕虜の墓地を捜している連中がいた。クズネツォフ助教授とクレンスコフ親子がそうだった。来る前に色々地図を作り想像を働かせたが、生還した同期生のいう事も当てに出来なかった。資料を作った四方辰六郎の地図が当たっていた。ドシヤ振りの雨の中、辿り着いた。ロシア墓地の真中に位置していた。墓標もない。唯々、白樺林の所々に赤松も生えている山腹の小さな凹地だ。周辺のロシア人墓地の祭祀後のゴミが投げ出されている一角、慰霊行事をしようにも、豪雨の中、足の踏み場ない。でもあるが故か、「此処だ。違いあるまい。」確信に近い気持だった。慰霊を言い、塔婆を残して来た。同期の里見恒雄他1名と公表されているのに、現地では日本人捕虜を8名埋葬したと断言している。他の人達の名前は判らない。記事らしい物も無いという。しかし、此の言い伝えは信じるべきではないだろうか。

墓碑
(白大理石)



むすび 遺骨の故国帰運を

同期・戦友・英霊に招かれて、戦後、日本人は初めてだというシベリアの各所へ行く事が出来た。野宿に近い状況を覚悟で出かけたが、予想外の歓待・歓迎を受けた。それでも、不可能と思つた事が成就したのは仏の力、時には姿を騙してまで待つていた人達の怨念の力としか思えない。

一般のソ連の人達は、日本人の墓の維持管理・保存について、何度も何度も私達に謝まり、改善を誓ってくれた。共に慰霊し、共に涙してくれた。好意は胸に滲みた。だが、同胞を多数殺されたドイツ人には謝罪しても、大統領・為政者からは、此の事実に対して、未だ謝罪の言葉は無い。世間は、領土問題に眼を奪われ、右往左往、右顧左眄している。私達には忘れられないし、残された問題もある。慰霊墓参に遺族を案内すること。遺骨収集をし故里へ帰還させる事。現地に墓碑・慰霊碑を建てることである。ブカチャーチャ一本松墓地には別図の様な墓碑の建立を申し出てあるが、今後もこれ等の実現に努力したい。各位の御指導御支援を懇願し報告とする。合掌。